

信濃町の埋蔵文化財

長野県上水内郡信濃町

平成26年度町内遺跡発掘調査報告書

2 0 1 5

信 濃 町 教 育 委 員 会

例 言

1. 本書は平成26年度に実施した長野県上水内郡信濃町における開発事業に伴う確認調査及び工事立会の報告書である。
2. 調査は国からの補助金交付を受けて信濃町教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆、編集は調査担当者である渡辺哲也がおこなった。編集の補佐を黒澤由美がおこなった。
4. 本調査の図面類、写真等の資料はすべて信濃町教育委員会に保管されている。
5. 調査体制は次のとおりである。

調査主体者 信濃町教育委員会

事務局 教 育 長 静谷一男

教 育 次 長 小林義之

生涯学習係長 風間健男

生涯学習係（文化財担当）主査 浪沢幸男

調査担当者 野尻瀬ナウマンゾウ博物館係 学芸員 渡辺哲也

整理参加者 黒澤由美、黒柳陽子

6. 土層の土色観察には『新版標準土色帖』[小山・竹原1967]を用いた。
7. 調査をおこなうにあたり、下記の方々や機関にご指導、ご協力をいただいた。記してお礼を申し上げる次第である。

(敬称略、五十音順)

荒井輝人、斉藤義忠、酒井国夫、佐藤寅雄、静谷久仁夫、清水等、高橋正樹、竹内都男、中村昭彦、中村恵美、吉川仁、信濃町産業観光課

目 次

I 信濃町の環境と遺跡	1
1. 自然的環境	1
2. 歴史的環境	2
II 調査の内容及び成果	3
1. 狐久保遺跡	3
2. 上ノ原遺跡	4
3. 正徳寺遺跡	5
4. 正徳寺遺跡	6
5. 東森遺跡（2014雇用促進住宅予定地点）	6
6. 日向林B遺跡	10
7. 日向林B遺跡	10
8. 一里塚遺跡	11
9. 一里塚遺跡	12
10. 落影遺跡	12
11. 宮ノ腰遺跡	13

I 信濃町の環境と遺跡

1. 自然的環境

長野県上水内郡信濃町は長野県の北端に位置し、新潟県妙高市と県境を接している。日本海に面した海岸平野の高田平野と、内陸盆地の長野盆地との間にあたり、西には北から妙高、黒姫、飯縄火山、東には斑尾火山がそびえている。これらの火山に挟まれた地域には、標高650～750mの起伏に富んだ高原状の台地が広がっている(図1)。

西側の3つの火山では南に位置する飯縄山が最も古く、12から13万年前には活動を終了している。黒姫山は古期の活動が16から11万年前で、新期の活動がおよそ6万年前に活発になり、3万年前頃には活動が衰えている。妙高山は新期の活動が10万年前頃にはじまり、約6000年前に中央火口丘が形成され、現在に至っている。これら3つの火山の活発な活動により、各火山体の東側一帯には火山灰層が広く厚く分布している。中部更新統の火山灰層は20～30m、上部更新統の火山灰層は10m程である。東側の斑尾山は西側の火山よりも古く、およそ30万年前には活動を終わっていたと考えられている。この斑尾山の西麓に広がる緩やかな起伏の地形を、黒姫火山の崩壊によって生じた池尻川岩屑なだれ堆積物がせき止めたことにより、およそ7万年前に野尻湖の原形が誕生した。現在の野尻湖は面積が3.96km²で、水面の標高が654mである。こうした東西の火山に挟まれた低地帯があって、主に後期更新世から完新世の湖沼・河川堆積物からなる丘陵、段丘、低湿地などが現在の居住域となっている。

野尻湖の水は池尻川から南西へ流れ出した後、北へ向きを変えて関川に合流し、日本海へ注ぐ。長野市戸隠を

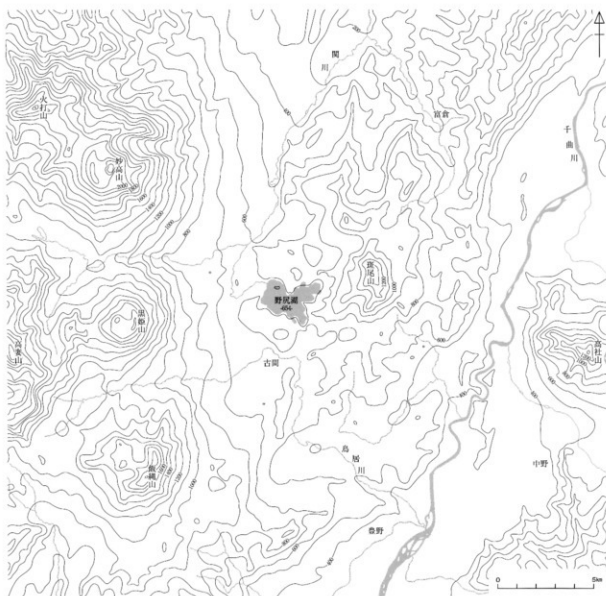


図1 信濃町周辺の地形

水源とする鳥居川は南東方向へ流れ出し、千曲川と合流して、その後信濃川と名前を変えて日本海へ注ぐ。二つの水系の分水嶺は現在の上信越自動車道信濃町インターチェンジ付近と考えられるが、この辺りはなだらかな高原状の地形となっている。分水嶺がなだらかな地形であることは、急峻な山地を越えることなく内陸部へ向かうことができることを意味しており、古くから人や動物の移動経路になっていたものと推測される。

現在人々が暮らす居住域は標高700m前後の地域で、日本海側の気候に属し、冬期は寒冷で多雪、夏期は比較的涼涼で、避暑地としても利用されている。

2. 歴史的環境

信濃町は前述のような地形の特徴により、日本海側と内陸部をつなぐ交通の要所にあたるため、古くから人々の往来が盛んであったと考えられる。野尻湖西岸の湖底に広がる立が鼻遺跡はおよそ4万年前の狩猟・解体場

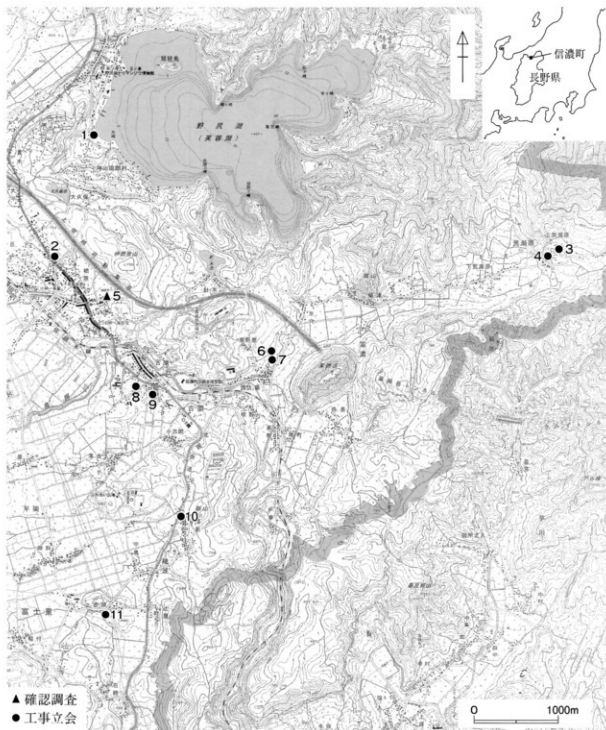


図2 調査地の位置（信濃町役場平成22年9月作成1/25,000地形図使用）※番号は表1に対応

表1 平成26年度に埋蔵文化財の通知・届出のあった遺跡一覧

No	遺跡名	よみ	原因	調査方法	調査面積	調査期間	出土点数	発掘日	終了日
1	狐久保	きつねくぼ	個人住宅	工事立会	(52.88㎡)	7/10	0点	5/9	-
2	上ノ原	うえのはら	倉庫	工事立会	(35㎡)	9/18	0点	7/10	-
3	正徳寺	しょうとくじ	個人住宅	工事立会	(84.5㎡)	7/24	0点	6/13	-
4	正徳寺	しょうとくじ	個人住宅	工事立会	(147.4㎡)	4/16	0点	H25 12/3	-
5	東裏	ひがしうら	集合住宅	確認調査	110.25㎡	7/2-7/22	0点		8/21
6	日向林B	ひなたばやしびー	倉庫	工事立会	(53㎡)	6/3	0点	4/28	-
7	日向林B	ひなたばやしびー	車庫	工事立会	(14.02㎡)	12/2	0点	11/13	-
8	一里塚	いちりづか	個人住宅	工事立会	(59.62㎡)	5/7	0点	2/15	-
9	一里塚	いちりづか	個人住宅	工事立会	(116.8㎡)	6/19	0点	2/26	-
10	落影	おちかげ	倉庫	工事立会	(72.87㎡)	6/6	0点	5/12	-
11	宮ノ腰	みやのこし	倉庫	工事立会	(29.74㎡)	5/12	0点	4/16	-

※()内は工事面積

(キルサイト)で、その周辺をナウマンゾウとそれを追う旧石器人が往来したと考えられている。野尻湖周辺には旧石器時代～縄文時代草創期の遺跡が40ヶ所あり、その遺跡のまとまりは野尻湖遺跡群と称されている。構成する遺跡はそれぞれ面積が広く、遺物分布の密度が高いことから、野尻湖の西に連なる丘陵上にはとぎれることなく遺跡がつながっているような印象を受ける。近年、上信越自動車道建設や国道18号線の改築工事などにより、長野県埋蔵文化財センターや信濃町教育委員会によって多数の遺跡で広範囲に渡って発掘調査がおこなわれ、膨大な数の遺物が得られている。それらの遺物の様子からは、各方面から人々が流入してきたことがうかがえる。

古代では東山道支道が通っていたと推定され、また、江戸時代には北国街道が整備され、加賀金沢藩の参勤交代や、佐渡からの金銀の運搬など、重要な街道として利用されていた。現在も国道18号線、上信越自動車道、JR 信越本線が通っており、交通の要所であることに変わりはない。また、関川がかつての信濃と越後の国境となっていたため、こうした歴史的な地理的条件を備えた地域でもある。中世の山城が多いことも、交通の要所として争奪戦がおこなわれた地であることを物語っている。

信濃町には現在までに173ヶ所の遺跡が知られている(信濃町教育委員会, 2003a)が、以下のように時代によって遺跡数の変遷に特徴が見出せる。①旧石器時代の遺跡が多く存在する。②縄文時代では草創期、早期の遺跡数が多く、前期以降の遺跡数は少なくなる。特に中期が少ない。③弥生時代、古墳時代の遺跡数は少なく、平安時代になると遺跡数が増加する。

II 調査の内容及び成果

埋蔵文化財包蔵地における土木工事に對し、平成26年度は11件の保護協議をおこない(図2、表1)、確認調査を1件、工事立会を10件実施した。確認調査では、本調査が必要とは認められなかったため、今年度は本調査を実施しなかった。原因では集合住宅建設が1件、個人住宅建設が5件、倉庫、車庫建設が5件であった。総数は昨年比で7件減少している。特に個人住宅建設が昨年よりも5件減少しており、平成26年4月に実施された消費税の増税の影響もその要因の一つと考えられる。

以下に調査の内容と成果を記述する。

1. 狐久保遺跡

A. 概要

所在地	信濃町大字野尻狐久保371-2
原因	個人住宅建設
調査方法	工事立会
調査面積	52.88㎡(工事面積)
調査日	平成26年7月10日
出土遺物点数	0点

B. 遺跡の環境

狐久保遺跡は野尻湖の西岸で湖が最も西へ張り出した先に位置し、北北東へ緩やかに下る斜面に立地する。遺跡内では1967年に県道建設に伴う発掘調査が実施され、縄文時代草創期の隆起線土器等が出上している(小林,

1968)。また、個人住宅建設に伴う試掘調査がこれまでに2件実施され、2002年の調査では弥生時代の遺物が出土し（信濃町教育委員会、2003b）、2005年の調査では縄文時代晩期の遺物が出土している（信濃町教育委員会、2006）。

C. 調査に至る経緯と調査の結果

遺跡内で個人住宅の建設が計画された（図3）。建設予定地の現状は荒蕪地で、過去に建造物があった形跡がないことから、遺跡は良好に残されているものと思われた。工事による掘削の深度は40～80cmの計画で、この深さでは遺物包含層に達するものと考えられたが、掘削幅が60cm以内であるため、狭小のために事前の発掘調査は困難と判断し、対応は工事立会とした。

工事の際に基礎工事のために小型バックホウで掘削した後現場を確認した。建設予定地は隣接する町道よりも低い位置にあり、道路から湖側への傾斜地となっていた。よって標高の高い西側は深く掘削し、東側は浅く掘削してあったが、深度は西側が50cm程度、東側は40cm程度であった。建設予定地全体の西側4分の1程度は掘削した深さまで攪乱を受けており、過去に何らかの掘削又は盛り土等がおこなわれた可能性があることが判明した。東側4分の3の部分は自然堆積の地層が分布していることを確認した。地層中に植物片を含んでおり、水成の堆積物と考えられ、集落跡等の遺跡が残されている可能性は低いと考えられ、遺物の出土も確認できなかったことから、遺跡に大きな影響はないと判断し、調査を終了した。

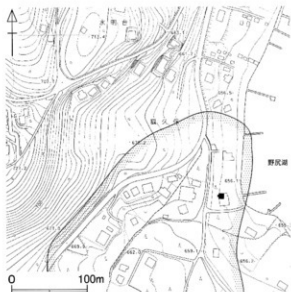


図3 狐久保遺跡の範囲と調査地の位置



写真1 狐久保遺跡工事立会

2. 上ノ原遺跡

A. 概要

所在地	信濃町大字柏原字上ノ原170-1、170-2
原因	個人住宅用倉庫建設
調査方法	工事立会
調査面積	35㎡（工事面積）
調査日	平成26年9月18日
出土遺物点数	0点

B. 遺跡の環境

上ノ原遺跡は貫ノ木遺跡と東奥遺跡に挟まれた丘陵上に位置する。遺跡は面積が広く、過去に多数の発掘調査が実施されてきた。主な調査は1990年の間型に伴う発掘調査（信濃町教育委員会、2008a）、1993年の町道改良工事に伴う発掘調査（信濃町教育委員会、2008b）、1994～1995年の上信越自動車道建設に伴う発掘調査（長野県埋蔵文化財センター、2000a、2000b）、1995年の店舗兼住宅建設に伴う発掘調査と個人住宅建設に伴う発掘調査（信濃町教育委員会、1996）、1995～1996年の県道改良工事に伴う発掘調査（信濃町教育委員会、2008c）、1996～1997年の町道改良工事に伴う発掘調査（信濃町教育委員会、1998）、1997年のガスパイプライン建設に伴う発掘調査（信濃町教育委員会、

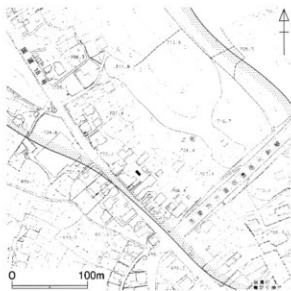


図4 上ノ原遺跡の範囲と調査地の位置

2007b)で、ほかにいくつか試掘調査が実施されている(信濃町教育委員会、2007a、2011)これらの調査では主に旧石器時代の遺物が多数得られている。

C. 調査に至る経緯と調査の結果

遺跡内で個人住宅用の倉庫の建設が計画された(図4)。現状は畑地であり、過去に大きな改変を受けておらず、遺跡が良好な状態で残されているものと思われた。本体基礎工では建物の外周を深さ60cm程度まで掘削する計画で、この深さでは遺物包含層に達するものと考えられたが、掘削幅が50cm程しかなく、狭小のために事前の発掘調査は困難と判断し、対応は工事立会とした。

基礎工事のために小型バックホウで掘削する際に立ち会ったが、実際は深いところで約50cm程度の深さであった。地層を確認したところ、地表から40cm程の厚さで柏原黒色火山灰層と呼ばれる黒ボク土が堆積し、その下に野尻湖発掘調査団で「モヤ」と呼んでいる暗黄褐色土を確認した。「モヤ」は旧石器時代の細石器文化の遺物を含む層であり、その層まで攪乱を受けずに良好な状態で残されていることを確認した。なお、今回の掘削によってナイフ形石器を含む黄褐色ローム層までは達することはなかった。掘削された上からは遺物を検出することはできず、遺跡に大きな影響はないと判断し、調査を終了した。

3. 正徳寺遺跡

A. 概要

所在地	信濃町大字荒瀬原字諏訪久保173
原因	個人住宅建設
調査方法	工事立会
調査面積	84.5㎡(工事面積)
調査日	平成26年7月24日
出土遺物点数	0点

B. 遺跡の環境

正徳寺遺跡は斑尾山南麓に位置し、南西方向へ下る緩傾斜地に広がる遺跡で、縄文時代と平安時代の複合遺跡とされているが、遺跡内でこれまでに発掘調査がおこなわれたことはなく、遺跡の詳細は不明である。遺跡は信濃史料の第一巻上に掲載され(信濃史料刊行会、1956)、古くから知られた遺跡である。荒瀬原村誌によれば正徳寺という寺が文明年間(15世紀後半)に斑尾山が崩れたことによって堂宇が埋没した場所であり、それが小字名として残っているという。

C. 調査に至る経緯と調査の結果

遺跡内で個人住宅の建設が計画された(図5)。計画はかつて住宅があり、現在は更地となっているところへ新たに住宅を建設するというもので、事前に現地を確認したところ、傾斜地を切り土によって平坦に整地していることがわかり、遺跡が残されている可能性は低いと考えられたことから、対応は工事立会とした。

基礎工事のために小型バックホウで掘削する際に立ち会ったが、掘削の深度は40~55cm程で、広範囲に渡って攪乱を受けた地層が分布しており、過去に住宅があったことにより改変されている状況が確認できた。また、地表下10cmよりも下位で自然堆積の地層が見られる箇所が一部あったが、その地点では黄灰色シルト、



写真2 上ノ原遺跡工事立会

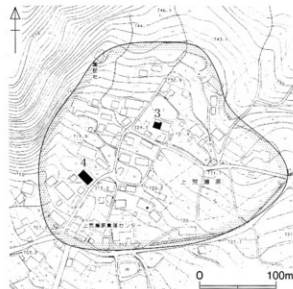


図5 正徳寺遺跡の範囲と調査地の位置



写真3 正徳寺遺跡工事立会

灰色シルトが分布していた。当初の予想通り、斜面を平坦に削ったことにより上位の地層が削られたことにより、古い水成の地層が地表付近に見られたものと考えられ、遺物包含層は除去されたものと判断した。よってこの地点には遺跡が残されていないことが確認できたことから、調査を終了した。

4. 正徳寺遺跡

A. 概要

所在地	信濃町大字荒瀬原229
原因	個人住宅建設
調査方法	工事立会
調査面積	147.4㎡(工事面積)
調査日	平成26年4月16日
出土遺物点数	0点

B. 調査に至る経緯と調査の結果

遺跡内で個人住宅の建設が計画された(図5)。計画はかつて住宅があり、現在は更地となっているところへ新たに住宅を建設するというもので、過去の建物の建設及びその撤去によって大きな改変を受け、遺跡が残されている範囲は少ないと判断されたため、対応は工事立会とした。

基礎工事のために小型バックホウで掘削する際に立ち会ったが、掘削の深度は50~60cm程で、広範囲に渡って攪乱を受けている土層を確認したが、一部に粘土やシルトの水成堆積の地層が見られた。傾斜地を削平して宅地が造成されていることから、遺物包含層は削られ、この地点には遺跡が残っていないことが確認できたことから、調査を終了した。



写真4 正徳寺遺跡試掘調査

5. 東裏遺跡 (2014雇用促進住宅予定地地点)

A. 概要

所在地	信濃町大字東裏386-1
原因	集合住宅(雇用促進住宅)建設
調査方法	確認調査
調査面積	110.25㎡
調査期間	平成26年7月2日~22日
出土遺物点数	0点

B. 遺跡の環境

東裏遺跡は伊勢見山と国道18号線との間に位置し、伊勢見山南西側の山麓に、北西-南東方向に細長く広がる遺跡である。この遺跡は面積が広いことから、過去に多数の発掘調査が実施されてきた。主な調査は宅地造成と町道建設に伴う発掘調査(信濃町教育委員会, 2004)、1993~1995年の上信越自動車道建設に伴う発掘調査(長野県埋蔵文化財センター, 2000a)、1996年の高速道路バスタップ建設、個人住宅建設に伴う発掘調査(信濃町教育委員会, 1997)、1997年の天然ガスパイプライン建設に伴う発掘調査(信濃町教育委員会, 2007b)、1999年の個人住宅建設に伴う発掘調査(信濃町教育委員会, 2000)などがあり、ほかに小規模な発掘調査がおこなわれている(信濃町教育委員会, 2003b、2005、2007a、2008a、2012)。

C. 調査に至る経緯

信濃町(担当は産業観光課)が遺跡内で雇用促進住宅(集合住宅)を建設することになり(図6)、5月14日に担当課と現地を確認しながら、協議をおこなった。担当課では遺跡の有無や分布状況により住宅建設の詳細を決めるということで、図面の作成は未着手であり、発掘の通知が提出できる状況ではなかったため、文化財保護法第99条によって調査を実施することとし、土地の所有者、及び、農業委員会からの了解を得て調査を実施した。予定地の現状は荒蕪地であるが、以前は水田であったということで、所々に水が溜まる状況が見られた。地形は北から南へ向かって下る緩やかな傾斜地で、圃場の境界として2ヶ所に段が設けられていた。

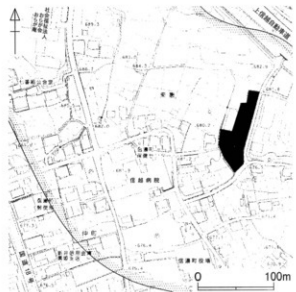


図6 東裏遺跡の範囲と調査地の位置

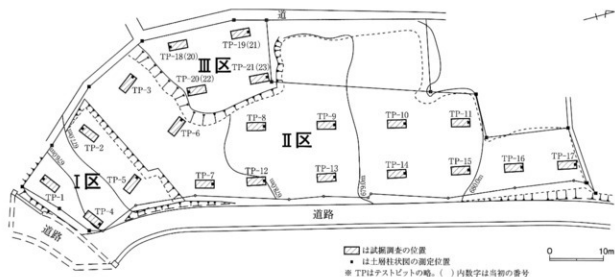


図7 東裏遺跡調査地のテストピット (TP) の位置

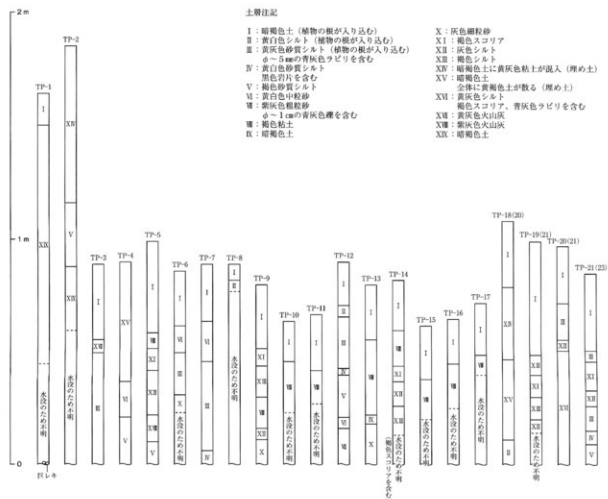


図8 東裏遺跡テストピット (TP) の柱状図



写真5 東裏遺跡調査のようす



写真6 東裏遺跡掘削のようす



写真7 東裏遺跡調査地遠景



写真8 東裏遺跡 TP-1



写真9 東裏遺跡 TP-1 水没の状況



写真10 東裏遺跡 TP-3



写真11 東裏遺跡 TP-5



写真12 東裏遺跡 TP-12



写真13 東裏遺跡 TP-15



写真14 東裏遺跡 TP-17



写真15 東裏遺跡 TP-18



写真16 東裏遺跡 TP-19

D. 調査の方法

かつて水田であった場所のために全体にぬかるんでいる状況であったため、手掘りによる掘削は困難と判断し、小型のバックホウによる慎重な掘削によっておこなうこととした。バックホウは0.25mクラスとし、バケットは平爪で幅約1.5mのものを付け、深さ10cm以内で地面を平坦に掘削する作業をくり返してもらい、その状況を観察することにより、遺構、遺物が残されているか否かの確認をおこなった。掘削する範囲はおおよそ1.5×3.5mとし、このテストピット（TPと略す）を概ね10m間隔で設定した。TPは全部で21ヶ所となった（図7）。

E. 調査の結果

調査地は地形により大きく3ヶ所に分けることができる。調査地は全体に北から南に向かって低くなっているが、南端側は特に一段低くなり、傾斜がやや急になっている。ここをⅠ区とした。次に、西側に一段高くなっている地点があるが、ここは調査区外の西側の地形から続く地形で、今回の調査地の中では他の地点に比べ乾燥しており、遺跡が残されている可能性が高いと考えられた。ここをⅢ区とし、Ⅰ区とⅢ区以外の比較的平坦な範囲をⅡ区とした。

調査の結果、すべてのテストピットで遺構、遺物を検出することはできなかった。以下に観察した地層について述べる。なお、掘削直後から水が溜まる箇所もあり、水没した場所については観察できなかった。図8で「水没のため不明」とあるのはこのような理由による。

Ⅰ区（TP-1・2、4・5）は調査地で最も低い地点で、暗褐色土が厚く堆積していた。TP-1とTP-2は暗褐色土から地層の色が変わるところまで掘り下げた結果、深いところで185cmの深さに至った。TP-1は暗褐色土の下位に巨レキを含む層があることを確認した。TP-4と5では地表下40～50cmで水成の堆積物である砂や粘土の層が見られることから、Ⅰ区では西側に急激に下る深い谷状の地形があり、それを暗褐色土が埋めていることがわかった。Ⅱ区では暗褐色土の下位に水成の堆積物である粘土層、シルト層、砂層が見られた。暗褐色土の下底が直線的になっている状況が見られたことから、水田にするために粘土層等を平坦に整地したのち、暗褐色土を上に乗せたものと考えられる。Ⅲ区は調査地内で部分的に高台になっている地点で、平坦になっていた。地表下に暗褐色土があり、その下位には水成の堆積物が見られた。TP-18は埋め土が厚く施されており、低い土地を埋めて平坦に整地したことがうかがえる。

以上のように、Ⅰ区からⅢ区はいずれも地表下に暗褐色土があり、その下位に水成層が分布していることが確

認された。暗褐色土は耕作土として入れられた可能性が高く、全体に攪乱を受けていることが考えられる。以上のことから、この地点には遺跡は残されていないものと判断した。この周辺の住民の話によれば、この場所の北側には湧水があり、この地点を通過して南へ流れていくということである。なお、今回の調査でこの地点は埋蔵文化財が包蔵されていないことになったが、地層中に水を多く含んでいることなども判明したため、この地点に雇用促進住宅を建設する計画は再検討することになり、すぐにこの地に建物が建設されることはなくなった。

6. 日向林B遺跡

A. 概要

所在地	信濃町大字富濃字日向林2253-167
原因	個人住宅用倉庫建設
調査方法	工事立会
調査面積	53㎡(工事面積)
調査日	平成26年6月3日
出土遺物点数	0点

B. 遺跡の環境

日向林B遺跡は水穴集落と諏訪ノ原集落の間に位置する丘陵の、南東方向の低地に向かって緩やかに下る斜面に広がる遺跡で、旧石器、縄文、平安、中世の複合遺跡である。今回の建設予定地の西側では2013年に住宅建設に先立つ試掘調査がおこなわれており、縄文時代早期の土器片2点が得られている(信濃町教育委員会、2014)。また、この地点から町道を挟んで東側では1996年に住宅建設に先立つ発掘調査がおこなわれていて、縄文時代早期、前期、後期の遺物が得られている(信濃町教育委員会、1997)。また、この遺跡内では1993年から1995年に上信越自動車道建設に伴う発掘調査がおこなわれ、旧石器時代前半の遺物が大量に出土し、遺物の分布状況から環状の集落跡と考えられている(長野県埋蔵文化財センター、2000C)。この遺跡から出土した石器類の一部は現在、国の重要文化財に指定されている。

C. 調査に至る経緯と調査の結果

遺跡内で前年に住宅が建設された東側に個人住宅用の倉庫の建設が計画された(図9)。建設予定地は住宅が建設される以前は荒地で、さらにそれ以前は畑地であった。本体の基礎工事で外周を深さ60cm程度掘削する予定で、この深さでは遺物包含層に達すると考えられたが、掘削幅が50cm程しかなく、狭小のために発掘調査が困難と考えられたことから、対応は工事立会とした。

地表下には攪乱を受けた暗褐色土があり、これは畑の耕作土と判断した。その下位に橙色スコリアや青灰色ラピリを含む黄褐色土が見られたが、暗褐色土の基底は直線的になっていて、周辺の地形から見て、南へ下る斜面に平坦な畑を造成するために切り土をおこない、その上に耕作土の暗褐色土を載せたものと判断した。黄褐色土は上部野尻ローム層Ⅰ以下の地層と考えられることから、畑の造成により、旧石器時代の遺物包含層は削平され、この場所には遺跡がほとんど残されていないと判断し、調査を終了した。

7. 日向林B遺跡

A. 概要

所在地	信濃町大字富濃字諏訪の原2045-7
原因	車庫建設
調査方法	工事立会
調査面積	14.02㎡(工事面積)

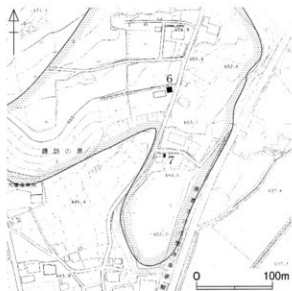


図9 日向林B遺跡の範囲と調査地の位置



写真17 日向林B遺跡工事立会

調査日 平成26年12月2日

出土遺物点数 0点

B. 調査に至る経緯と調査の結果

遺跡内で車庫の建設が計画された(図9)。建設予定地は住宅の隣接地で、すでに平坦に造成されている場所であった。本体基礎工事では外周を深さ50cm程度まで掘削する計画で、この深さでは遺物包含層に達するものと考えられたが、掘削幅が50cm程しかなく、狭小のために発掘調査が困難と考えられたことから、対応は工事立会とした。

工事で小型バックホウにより掘削する際に立ち会ったが、地表下には橙色スコリアや青灰色ラビリを含む黄褐色土が見られ、掘削した下底まで続いていた。この層は上部野尻ローム層Ⅰ以下の地層と考えられることから、それより上の地層は宅地の造成により削平され、この地点には遺跡が残されていないと判断し、調査を終了した。



写真18 日向林B遺跡試掘調査

8. 一里塚遺跡

A. 概要

所在地 信濃町大字古間字柳原518-2

原因 個人住宅建設

調査方法 工事立会

調査面積 5962㎡(工事面積)

調査日 平成26年5月7日

出土遺物点数 0点

B. 遺跡の環境

一里塚遺跡は鳥居川の南側の丘陵上に、平坦面と北東側へ下る緩傾斜地に広がる遺跡で、近くには旧北国街道の古間一里塚跡がある。この遺跡内では個人住宅の建設が相次いでおり、それに伴う発掘調査が実施されてきた。1995年(信濃町教育委員会, 1996)、2001年(信濃町教育委員会, 2002)、2006年(信濃町教育委員会, 2007a)、2010年(信濃町教育委員会, 2011)に小規模な発掘調査がおこなわれ、主に古代、中世の遺物が出土しているが、これまでの調査で遺構は検出されていない。

C. 調査に至る経緯と調査の結果

遺跡内で個人住宅の建設が計画された(図10)。計画は畑地であったところへ住宅を新築するというもので、本体基礎工事では外周を深さ50cm程度まで掘削する予定であった。この深さでは遺物包含層まで達するものと考えられたが、掘削幅が60cm程しかなく、狭小のために発掘調査が困難と考えられたことから、対応は工事立会とした。

本体基礎工事のために外周を小型バックホウで掘削する際に立ち会ったが、地表下には約40cmの厚さで暗褐色土があり、その下位には淡黄灰色シルトが分布していた。暗褐色土には黄褐色土が混入しており、耕作によって攪乱を受けていることが確認できた。暗褐色土と淡黄灰色シルトとの境界が直線的になっており、畑を平坦に造成するために淡黄灰色シルトの層まで削平し、その上に耕作土を載せて畑にしたものと考えられることから、この地点には遺跡が残されていないと判断し、調査を終了した。

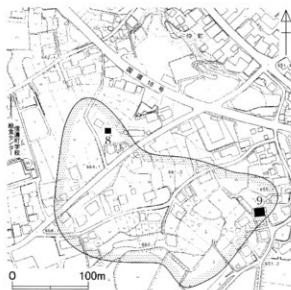


図10 一里塚遺跡の範囲と調査地の位置



写真19 一里塚遺跡工事立会

9. 一里塚遺跡

A. 概要

所在地	信濃町大字古間字一里塚972-ロ
原因	個人住宅建設
調査方法	工事立会
調査面積	116.8㎡ (工事面積)
調査日	平成26年6月19日
出土遺物点数	0点

B. 調査に至る経緯と調査の結果

遺跡内で個人住宅の建設が計画された(図10)。計画では既存の住宅を撤去した後、ほぼ同位置へ新たに

住宅を建設するというもので、本体基礎工事では外周を深さ45cm程度まで掘削する計画のため、この深さでは遺物包含層に達するものと考えられた。しかし、既存住宅の建設及びその撤去により大きな改変を受け、遺跡が残されている範囲は少ないことが予想されたことから、対応は工事立会とした。

本体基礎工事のために小型バックホウで掘削した際に立ち会ったが、かつて住宅が建っていた敷地全体が傾斜地を平坦に造成してあり、その法面を確認しただけで、粘上層やシルト層の水成堆積物の層まで削平されていて、黒ボク土などの遺物包含層はすでに残されていないことが確認できたため、今回の工事による遺跡への影響はないと判断し、調査を終了した。



写真20 一里塚遺跡工事立会

10. 落影遺跡

A. 概要

所在地	信濃町大字総波字古道畑1406
原因	個人住宅用倉庫建設
調査方法	工事立会
調査面積	72.87㎡ (工事面積)
調査日	平成26年6月6日
出土遺物点数	0点

B. 遺跡の環境

落影遺跡は落影の集落の中央部と五厘山の北側へ下る裾野に広がる遺跡で、平安と中世の遺跡とされている(信濃町教育委員会, 2003a)が、これまでに工事立会は何度か実施されているものの、発掘調査がおこなわれたことがないために遺跡の詳細は不明である。

C. 調査に至る経緯と調査の結果

遺跡内で個人住宅用の倉庫建設が計画された(図11)。建設予定地は、かつて倉庫があり、現在は更地になっている場所へ新たに同規模のものをほぼ同位置へ建てるというものであった。本体基礎工事では深さ52cmまで掘削する計画で、この深さでは遺物包含層に達するものと考えられたが、掘削幅が50cm以内ということで、狭小のために発掘調査は困難と判断し、対応は工事立会とした。

基礎工事のために外周を小型バックホウで掘削する際に立ち会ったが、北側と南側では地層の状況が異なっていた。北側は攪乱を受けた暗褐色土の下に橙色スコリアや青灰色ラビリを含む黄褐色土が見られた。この地点の地形は北から南へ向かって下っていて、それを平坦にするために北側を削平し、黒ボク土などの遺物包含層はすでになくなっていることがわかった。南

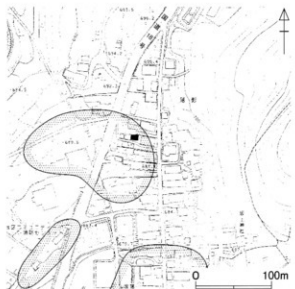


図11 落影遺跡の範囲と調査地の位置



写真21 落影遺跡工事立会

側は野尻湖発掘調査団で「モヤ」と呼んでいる暗黄褐色土や、上部野尻ローム層と呼んでいる黄褐色土が見られ、擾乱を受けていない層が残っていることを確認した。遺跡が残されている可能性があったため、遺構、遺物の有無を調べたが、検出できず、遺跡に大きな影響はないと判断して、調査を終了した。

11. 宮ノ腰遺跡

A. 概要

所在地	信濃町大字徳波282-5、283-2
原因	個人住宅用倉庫建設
調査方法	工事立会
調査面積	29.74㎡ (工事面積)
調査日	平成26年5月12日
出土遺物点数	0点

B. 遺跡の環境

宮ノ腰遺跡は日の出山の南東側の丘陵上に広がる遺跡で、平成9年(1997)に宅地造成が計画されたために試掘調査が実施され(信濃町教育委員会, 1998)、古代と中世の遺物が多数出土したが、開発計画は中断となったために本調査は実施されず、遺跡の詳細な状況は明らかにされていない。

C. 調査に至る経緯と調査の結果

遺跡内で個人住宅用の倉庫の建設が計画された(図12)。計画は宅地内の更地のところへ建設するというもので、本体基礎工事で掘削する深さは60cm程度であったため、この深さでは遺物包含層に達すると考えられたが、掘削幅が50cm以内ということで狭小のために発掘調査は困難と判断し、対応は工事立会とした。

基礎工事のために外周を小型バックホウで掘削する際に立ち会ったが、地表下には黒ボク土はなく、すぐに黄褐色土が見られた。つまり、隣接する住宅を建設する際に平坦に造成され、その時に遺物包含層である黒ボク土は除去されたと考えられる。よって、この地点には遺跡が残されていないと判断し、調査を終了した。

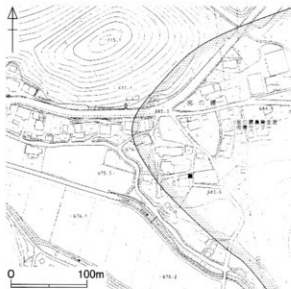


図12 宮ノ腰遺跡の範囲と調査地の位置



写真22 宮ノ腰遺跡工事立会

文献

- 小林学 1968 「長野県水上内郡信濃町狐久保遺跡緊急発掘調査概報」『信濃町誌』
 小山正忠・竹原秀雄 1967 「新版 標準土色帖」
 信濃史料刊行会 1956 『信濃史料 第1巻上』
 信濃町教育委員会 1996 「[上ノ原遺跡(4次)ほか発掘調査報告書]」
 信濃町教育委員会 1997 「[大道下遺跡(4次)ほか信濃町内遺跡発掘調査報告書]」
 信濃町教育委員会 1998 「[上ノ原遺跡(7次)ほか発掘調査報告書]」
 信濃町教育委員会 2000 「[仲町遺跡(個人住宅地点)ほか発掘調査報告書]」
 信濃町教育委員会 2002 「[仲町遺跡・一里塚遺跡 2001個人住宅地点発掘調査報告書]」
 信濃町教育委員会 2003a 「[信濃町の遺跡分布図]」
 信濃町教育委員会 2003b 「[平成14年度町内遺跡発掘調査報告書]」
 信濃町教育委員会 2004 「[東裏遺跡 東裏閉地地点・町道梁山線地点発掘調査報告書]」
 信濃町教育委員会 2005 「[平成16年度町内遺跡発掘調査報告書-杉久保遺跡ほか-]」
 信濃町教育委員会 2006 「[平成17年度町内遺跡発掘調査報告書-狐久保遺跡ほか-]」
 信濃町教育委員会 2007a 「[平成18年度町内遺跡発掘調査報告書-清明台遺跡ほか-]」
 信濃町教育委員会 2007b 「[上ノ原遺跡・東裏遺跡・裏ノ山遺跡]」
 信濃町教育委員会 2008a 「[上ノ原遺跡(第1次・北部高校分校跡地点)発掘調査報告書]」
 信濃町教育委員会 2008b 「[上ノ原遺跡(第2次・町道地点)発掘調査報告書]」
 信濃町教育委員会 2008c 「[上ノ原遺跡(第5次・峠道地点)発掘調査報告書]」
 信濃町教育委員会 2011 「[平成22年度町内遺跡発掘調査報告書-宮ノ腰遺跡ほか-]」
 信濃町教育委員会 2012 「[平成23年度町内遺跡発掘調査報告書-辻屋遺跡ほか-]」

信濃町教育委員会 2014 〔平成25年度町内遺跡発掘調査報告書〕

長野県埋蔵文化財センター 2000a 〔上信越自動車埋蔵文化財発掘調査報告書15-信濃町内その1-裏ノ山遺跡・東裏遺跡・大久保南遺跡・上ノ原遺跡〕

長野県埋蔵文化財センター 2000b 〔上信越自動車埋蔵文化財発掘調査報告書16-信濃町内その2-縄文時代～近世編〕

長野県埋蔵文化財センター 2000c 〔上信越自動車埋蔵文化財発掘調査報告書15-信濃町内その1-日向林B、日向林A、七ツ栗遺跡、大平B遺跡〕

報告書抄録

書名	平成26年度町内遺跡発掘調査報告書							
副書名								
シリーズ名	信濃町の歴史文化財							
シリーズ番号								
編著者名	渡辺哲也							
編集機関	信濃町教育委員会							
所在地	〒389-1305 長野県上水内郡信濃町柏原428-2 TEL: 026-255-5923							
発行年月日	2015年(平成27年)3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
296-33 東墓	長野県上水内郡信濃町大字 柏原386-1	20583	70	36度 48分 28秒	138度 12分 27秒	20140702 ～ 20140722	110.25	跡地調査 (集合住宅)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
東墓	散布地	縄文時代		出土品なし				

平成26年度町内遺跡発掘調査報告書

発行 平成27年(2015)3月31日
 発行者 信濃町教育委員会
 〒389-1305
 長野県上水内郡信濃町大字柏原428-2
 TEL 026-255-5923
 印刷 信毎書籍印刷株式会社
 〒381-0037
 長野県長野市西和田1-30-3
 TEL 026-243-2105